

史料紹介

中学校令公布前後における広島中学校改革史料

小宮山 道夫

中学校令の公布と中学校の改革

一八八六（明治一九）年四月二〇日付勅令第一五号「中学校令」により、中学校は尋常中学校と高等中学校の二種に分けられることとなった。各府県に設けられていた中学校は、尋常中学校として従来どおり府県財政の下で運営されるか、高等中学校として官立へ移管し高等普通教育を施す学校へと改革するかの選択を迫られたといえる。多くの中学校は中学校令および同年六月二二日付文部省令第一四号「尋常中学校ノ学科及其程度」に規定される内容を満たすことに苦勞していた。このため高等中学校への改革を志向できた府県はごく一部であった。

同年七月一日付文部省令第一六号「高等中学校ノ学科及其程度」により高等中学校の学科課程が明らかにされた。しかし全国に五校を置くとされた高等中学校の設置区域の公表には中学校令公布から半年以上の時間を要した。同年十一月三〇日付文部省令告示第三号「高等中学校ノ設置区域」により、広島県は現在の近畿・中国・四国地方全体

に相当する最大区域の第三区域に組み入れられた。かつて官立英語学校や官立師範学校が置かれた背景を持つ広島区に高等中学校設置の計画があったのかどうかは、従来具体的には明らかにされていない。¹⁾ 本稿では、広島大学図書館所蔵の今中文庫から当該期の広島中学校拡張計画に関わる史料を載録する。²⁾

凡例

- 一、史料にはその内容を示す標題を付し、出典を注記により示した。
- 一、字体は常用漢字、人名用漢字は、原則としてその字体を用い、それ以外のものおよび俗字・略字・異体字などについては正字を用いた。コト、トモ、シテの合字は上下に「」を付けて表した。
- 一、仮名づかいは原文のままとした。
- 一、活字印刷の本文に追筆などがある場合は、その上下に「」を付け、△追筆▽と右傍に示した。
- 一、原本に見せ消ちがある場合には、見せ消ち部分に取消線を引き、

訂正後の文字を上下に「」を付けて右傍に示した。

- 一、読点は適宜付した。
- 一、濁点は原文のままとした。

史料① 広島中学校規模拡張願書³⁾

(願書并ニ指令ノ写)

広島中学校規模拡張之儀ニ付願

広島中学校ノ義ハ御設置以來漸ニ整備ニ帰シ候得共生徒定員尚少
 ナクシテ夥多ノ小学中等科卒業者ヲ待ニハ未充分ニ無之又用書ハ
 専和漢ノ書ナルカ故ニ中学ヲ卒ヘ尚進ンテ高等ノ学業ヲ修メント
 欲スル者ノ大学等ニ入学シ得ヘキ学力ヲ予備スルニハ少シク不便
 トスル所有之此両者何卒御改良ニ相成中学ノ教育今一層普及仕候
 様相成度本願御聞届被下候得ハ私共等別記之通り方法相設ケ該校
 経費支弁ノ途相立候様各自応分ノ義損ヲ以テ学資寄付仕其取支ハ

○(別紙ノ甲)

明治十九年		同二十年	
募金	壹萬九千円	同	壹萬九千円
積金	利子 千三百三拾円	前年残金	壹萬九千円
支出	ナシ	支出	三千円 貳千円 貳千円 八拾円
残金	壹萬九千円	経費へ 敷地代 圖書器 械同 雑費	三萬貳千貳百五拾円

別紙甲ノ通ノ見込ニ有之又改良ノ廉々ハ別紙乙ノ通ニ有之候又右

募集ノ資金蓄積ノ方法ハ総テ公債証書等トシテ永遠ニ保管相成度
 又毎年ノ利子ノ余剰金等有之候得ハ総テ資金へ合併漸次増殖該校
 ノ基礎益鞏固永久維持ノ法相立チ候様致度此段奉願候以上

但規模拡張ニ就テハ現今ノ校舎ハ狹隘ニ付別紙丙印ニ準シ校舎
 新築相成度候也

明治十九年三月一日

首唱者惣代

広島県令千田貞暁殿

(朱書) 学第一七二号

願之趣聴届候事

明治十九年三月二十日

広島県令千田貞暁印

同 二十一年	同 四十七百五拾円 同 百七十五人	同 壹萬九千円	同 貳千貳百五拾七円五拾銭 同 三萬貳千貳百五拾円	同 三千円 三千五百円 五百円 四拾七円五拾銭	同 經費へ 建築 圖書 器械 費	同 四萬六千四百六拾円
同 二十二年	同 五千円 同 二百人	同 壹萬九千円	同 三千貳百五拾貳円貳拾銭 同 四萬六千四百六拾円	同 三千円 四千円 五百円 三拾貳円貳拾銭	同 經費へ 建築 圖書 器械 費	同 六萬千八百八拾円
同 二十三年	同 五千五百円 同 二百廿五人	同 壹萬九千円	同 三千貳百八拾貳円六拾銭 同 六萬千八百八拾円	同 三千円 八千五百円 八百円 三拾貳円六拾銭	同 經費へ 建築 圖書 器械 費	同 七萬貳千百三拾円

○（別紙ノ乙）

中学校改革意見

一 目的の主ヲ中人以上ノ者陸海軍学校大学校其他高等ノ専門学校ニ
 入ルカ為ニ忠孝彝倫ノ道ヲ本トシテ高等普通ノ学科ヲ授クル所
 トス

一 学期六ヶ年ト定メ卒業スレハ大学科高等専門学科等ヲ修ムルヲ
 得ヘク其四ヶ年ノ科業ヲ卒フレハ高等中学校ヲ修ムヘキハ勿論
 又普通文科師範学科其他諸専門ノ学科等ヲ修ムル〔コト〕ヲ得
 サシム

一 生徒定員ハ二百五十名トス
 一 生徒ハ品行端正身体強健小学中等科卒業以上ノ学力アル男子ニ
 限ル

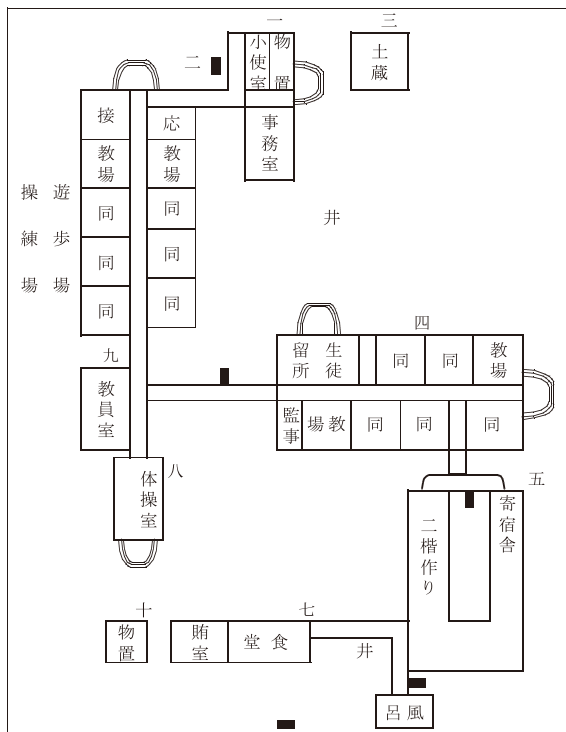
一 生徒中品行端正学芸優長ナルモノハ学資ヲ給与シテ之ヲ褒賞シ
 又ハ学資ヲ貸与シテ陸海軍学校大学校若クハ高等専門学校等ニ
 留学セシム

但本文貸費ハ所就ノ学校ト学科トニ随ヒ其都度適宜ニ之ヲ定
 メ又其弁償年期ハ凡十ヶ年賦トシ褒賞ハ生徒ノ等級ニ随ヒ之
 ヲ三等ニ別ツ即左ノ如シ

第一年第二年生 月壹円
 第三年第四年生 月壹円五拾銭
 第五年第六年生 月貳円
 一生徒修学ノ便ヲ計リ寄宿舎ヲ設ク
 一教科用書ハ生徒ノ願ニ依リ可成貸与スルモノトス
 一学課^{マツ}科程ハ文部省通則ニ拠リ教科用書ハ可成洋書ヲ用フ
 一授業料ハ凡初等科生徒一期四円五拾銭高等科生徒二期六円他府
 県在籍初等科生徒一期六円高等科生徒一期九円ノ見込

- (別紙ノ丙)
- 一 四十八坪 七百貳拾円
 - 二 二百二十六坪 千八百九拾円
 - 三 二十五坪 六百貳拾七円
 - 四 百二十八坪 千九百貳拾円
 - 五 二百六十五坪 五千三百円
 - 六 二十四坪 三百九拾円
 - 七 七十五坪 八百七拾五円
 - 八 九十六坪 千四百四拾円
 - 九 二十四坪 三百六拾円
 - 十 二十五坪 貳百五拾円
 - 便所十二坪 百五拾六円
 - 伝廊下六十五坪 六百五拾円
 - 井戸二ツ 五拾円

水道 百貳拾円
 風呂 六拾円
 門柵等 千百九拾貳円
 敷地 六千坪 貳千円
 計壹萬八千円



寄付金募集規則
 第一条 寄付金額ハ本年ヨリ向五ヶ年間ニ於テ金九万五千円ニ
 至ラシムルヲ以テ目的トシ外ニ創立事務取扱費千五百円ヲ初
 年ニ募集スルモノトス

第二条 寄付金ハ戸長若クハ有志者ヘ其町村ノ募集并取纏メ方ヲ依頼スルモノトス

第三条 篤志者ハ寄付スヘキ金額并年賦月賦納メ方等戸長若クハ有志者ヘ通知スルモノトス

第四条 戸長若クハ有志者ハ前条ノ通知ヲ受クルニ於テハ金額郡村名番邸姓名納付方等帳簿ニ書載実印ヲ受ケ而シテ之ヲ寄付金願書トナシ其筋ヘ進達スルモノトス

但本文寄付ハ普通ノ手続ニ依リ願出ツルモ妨ナシ

寄付願書式

一金何程(願書連署ナルトキハ此処ニ篤志者姓名及人別金額ヲ列記ス)

私義県立広島中学校ノ拡張ヲ熱望候ニ付予テ主唱者総代ヨリ願出候趣旨ヲ以テ本行金員一時(何ケ年月賦ニテ)寄付仕度此段奉願候也

年号月日

住所姓名印

戸長姓名印

県令宛

第五条 有志者寄付金ハ普通ノ手続ヲ以テ納付スルモノトス

明治十九年十二月二十四日

広島区長 栗原幹 印

〔今中耕作〕殿

史料③ 広島中学校拡張趣意書送付状

拜啓益御清適慶賀此事ニ候陳ハ曩ニ広島中学校寄付金募集〔委員〕依嘱相成候就テハ不日区長ヨリ右拡張之趣旨等詳細御咄可有之筈ニ候得共右趣意書予メ御送付申上候間御落手被下度右摘要ノミ申進候早々

頓首

明治廿年一月十二日

広島中学校寄付金

募集幹事

吉村正順

〔国泰寺村字真菰〕

今中耕作〕殿

史料② 広島中学校寄付金募集委員依嘱証

広島中学校寄附金第

〔拾〕部〔国泰寺村〕募集委員

依嘱候事

史料④ 広島中学校拡張趣意書

広島中学校拡張趣意書

方今文化次第ニ開ケ、業務ノ何タルヲ問ハス之ニ従事セント欲セハ適當ノ学力無ルヘカラサルハ論ヲ俟タス、而シテ其中人以上ノ

業務ニ従事センニハ低クトモ初等中学科卒業以上ノ学力ヲ有セサルヘカラス、況ヤ尚ホ進ンテ高等ノ業務ニ従事セント欲スルノ人ニ於テヲヤ、是レ中人以上ノ人物ヲ養成スヘキ学校ノ設ケ必要ナル所以ナリ、現今広島県下ノ二中学校一ハ広島二一ハ福山ニ設ケアリト雖「トモ」共ニ其規模大ナラス、故ニ将来有志子弟ノ望ミヲ達セシメント欲セハ今日ニ於テ中学校拡張ノ計画ヲ為サ、ルヘカラス然リ、而シテ之ヲ為サントスルヤ先ツ相当ノ資金ヲ備ヘサルヘカラス之ヲ地方税ニ資ランカ夥多ノ經費堪ヘサルヲ知ル之ヲ生徒ニ資ランカ實際行フヘカラス、然ハ則之ヲ如何セン、有志諸君ニ量リ同心協力シテ其成功ヲ期スルノ外ナシ、是ニ於テカ余輩員ヲ増加シ学科ヲ完備ニシテ充分ノ学力ヲ得セシメ、其優等ニシテ将来ニ望ミアル生徒ハ学費ヲ貸与シテ成業ヲ得セシムルノ法ヲ立テラレン「コト」ヲ県令ニ請ハントス、諸君幸ニ之ヲ賛助アラシ「コト」ヲ余輩懇請ノ至ニ堪ヘサルナリ

明治十九年三月

主唱者

正二位侯爵浅野長勲 浅野哲吉 上田亀次郎 浅野守夫 辻 維岳
清水 俊 安達重典 平山靖彦 岩本元行 山本 久
高橋琢也 北川精一 小島範一郎 桐原恒三郎 岡野七右衛門
栗原 幹 保田八十吉 伊東幸七 西広幸三郎 岩崎政助
〔岡 謙造^①山中正雄 渡辺又三郎^②吉村正順〕

寺尾小八郎	多田 寛	河野 徴	山科幹三	芥川九五兵衛
河野 葭一	海塚新八	岩崎永助	横山 莘	西村益三
森川調右衛門	世良嘉助	下田収蔵	尾野 漸	三木 達
山崎直次郎	廣藤忠男	菅原周策	浅井 馨	藤田 勉
後藤静夫	原田 稔	長崎正平	蔦勝次郎	松本九郎右衛門
齊藤四方作	津村扶敬	水谷 貢	栗村信武	山口大造
林 良之	日比 豪	能美円乘	長束穎雄	松村善助
恩田壽夫	山田養吉	黒川修三	景山正英	加藤 清
中尾正名	脇 栄太郎	逸見勝誠	水原適処	木村 正
磯兼雄平	山内 央	福原保定	平原尹則	中川秀夫
有田 久	平賀寛夫	村尾傳次郎	坂田 淳	竹内 務
近藤 新	藤田讓夫	高橋 崑	田坂 ^③ 博	田坂忠愛
小泉甚右衛門	岸本 崑	亀田元五郎	頼 俊直	水原淳二
八田新七	山口光風	長 芳樹	荒谷超松	植木俊夫
村上傳三朗	坪島禎司	瀬越住太郎	柴野義夫	岡崎 鼎
日高中一	宇都宮耕平	二階堂三郎左衛門	沢原為綱	江川久之助
浜本正蕃	神藤徳孝	三輪準太郎	水野金之助	末永徳三郎
児玉盛造	片山直太郎	山内謙一郎	浜岡文三郎	静川康義
丸石隼人	沢井太郎衛門	甲府喜三太	井上温造	田部信篤
西尾生一郎	佐々木亮之輔	久岡才十	沢田七右衛門	富永正男
五生分正通	宇都宮綏夫	若山常頼	片山直太郎	島地神一
佐々木忠兵衛	青盛敬篤	尾曾越正邦	河野玄哲	永尾深了
田村貞彦	山縣 猛	秋田靈巖	赤川六郎兵衛	佐武文麒

風呂野善平	藤川兆三郎	笹村林兵衛	笹岡吉右衛門	野川亮造	福城法振	若山源左衛門	原野甚左衛門	池田豊三郎	肥野藤鼎
武内平作	若宮豊助	下田角次	正戸源藏	片岡銀助	吉本瀬助	福岡栄次	住田平兵衛	西村彰策	光町尽三郎
石本善之助	一川多平次	中村鶴助	高水幹吾	末田淵吾	長尾利右衛門	加藤直之助	野村謙之助	松谷善太郎	須磨直太郎
杉本伏三郎	山口豊助	田上嘉助	原田臺造	丸谷勘助	神名多一郎	香川修一郎	原田讓兵衛	松田立菴	富士田順之助
古本孫助	品川六助	品村惣三	筒井大作	田中加一	片岡磯兵衛	田部善太郎	引地庫之助	横山源吉	酒井富吉
隅田良之助	隅田吉藏	金尾陵藏	平尾豊三郎	玉田文藏	建石唯助	竹内春作	藤岡兵助	桑原金七郎	森重法劍
松村大助	大歳七兵衛	水入彦一	下河内豊太郎	水岡序平	五反田良三郎	友近清三郎	藤峰徹心	熊谷彰造	齋庄左衛門
平井代助	新田権右衛門	渡辺孫右衛門	高岡準平	中道十兵衛	野平逸太郎	香川藤右衛門	葛原慎一	吉川己之助	細川清一郎
常永小右衛門	横繁聿造	熊野貫造	桑原源太郎	熊岡徳兵衛	宮本喜三郎	荒川吉太郎	藤重恒三郎	藤重彦市	児玉次右衛門
松浦庄九郎	平尾民三郎	伊藤誉治	横張清三郎	丸林亮助	加川垣太郎	深田宗平	佐々木省吾	小島孫三郎	岡島真作
和泉弥市	加藤周次郎	中本栄次郎	平田敬之助	長尾源九郎	藤井佐一郎	末田和三郎	福井兵助	増谷吾一郎	長岡保兵衛
橋本直兵衛	椿田佐吉	梅崎米藏	横竹元太郎	藤田泰助	加藤瀧之助	太歳恒三郎	中尾勇之助	田中恒右衛門	松浦豊三郎
田村万一郎	三井忠三郎	西川孫四郎	門前庄五郎	梶岡政七郎	谷口嘉藏	荒瀬俊平	杳内精一	井沢修次郎	松本武左衛門
田部繁次郎	吉村 稔	瀬川素平	加藤泰吉	田中潤一	登傳之助	田中甚三郎	菅瀬徹照	河野恕一	中光文之助
若山清藏	児玉藤之丞	小川高助	山口幾太郎	香川寿軒	横山重太郎	下屋敷勇右衛門	橘川源三郎	米川莊八	土井藤吉
磯川寅五郎	登 次郎	沖 豊次郎	吉田成一	保田和平	吉崎勝市	佐々井助八郎	和田惣右衛門	太田良吉	森川謙造
中尾松太郎	塚部 胖	鈴木岩之丞	杉江 驥	牛尾早之助	松島勝三郎	池田 隆	黒川軍助	平城玉信	天野万右衛門
杉本多郎一	吉田八右衛門	戸田助次郎	野上潔根	山本孫兵衛	戸井甚右衛門	奈川 貢	古河勲策	久都内百太郎	高束宜作
中村量之助	名越巖莊太	笹本龜太郎	伊藤公男	三村慎一	船本柳助	佐々木晴三郎	宥免彦太郎	中田善助	吉岡増次郎
児玉 博	市川俊三	山縣武兵衛	戸田寂照	高雄周見	前川愛助	平田三有	藤井護法	末田政市	中田半四郎
織田 葆	高橋乗観	高谷喜六	高杉判右衛門	高橋隆軒	溪口廉造	寺尾雪造	前田篤之助	岡本松齋	大下衆助
岩崎猛二	宇都宮完三	日野 基	三上永一	福岡猛祐	伊藤謙藏	瀧川幹造	河本武右衛門	釈 一道	若杉又兵衛
靈山諦念	西名賛六	田中豊人	世良準平	粟津深楽	大中佐十	佐 善海	倉石吉兵衛	安井助七	紫花信道

河原徳造	井上春蔵	吉田	税	田辺俊二	森下金之助	石橋得一	富田和策	齋藤善右衛門	西原円次	浮乗勝間
栗本守之助	原田幸太郎	服部庄右衛門	藤田清助	二宮凶發	松野六三郎	土居森太	三宅真三	香川勝太郎	金子七郎兵衛	
松岡謙三郎	岡崎彦太郎	藤田丈吉	澄谷静十郎	吉崎警造	岡村登一郎	山本庄三郎	立川貫郎九	森 廉三郎	児玉寛作	
清胤尋源	梶谷 恭	光石節之助	穴戸真采	加計八右衛門	谷下住正	野村萬恵	新宅直太郎	高橋柳三郎	河野新平	
郷田玄周	佐々木清太郎	富樫三良太	齋藤惣右衛門	栗岡三良兵衛	反本信太郎	国光卯兵衛	渡瀬来助	高橋静夫	細田儀左衛門	
保田為吉	永泉聞眺	斉藤文兵衛	河野幸一郎	寺西諦信	細田多事見	高橋藤吉	藤川昇三	細田 準	横道直三郎	
栗栖賢太郎	堤 松太郎	越智玄衆	河野光太郎	森 穆	金川象三郎	寺川豊吉	宮田彦四郎	森脇林三郎	隅田和三郎	
横山一三	池田龍太郎	正木改二	箕越兼蔵	森原 壽	小田保右衛門	土佐郡三郎	小田義夫	服部大二	服部吟助	
黒田友三	梶木政太郎	齋藤久次郎	森 軍次兵衛	栗栖儀市郎	瀧藤今蔵	正木善太郎	田中喜助	国川茂左衛門	武田直之助	
山脇宮太郎	政所和右衛門	深井隆三郎	齋藤三兵衛	麦生岩次郎	吉川大円	中野覚道	弓削甚六	田辺辰左衛門	熊野真端	
深井嘉三郎	上藤友十	河野松太郎	福田貞右衛門	河野藤右衛門	城仙道三	後藤幾平	大島一真	小松吉郎次	松浦唯次郎	
風岡庄蔵	岡本平十郎	岡本市太	岡本政之助	村竹新右衛門	秋山忠夫	橋本吉兵衛	鳥居儀右衛門	天野嘉四郎	児玉恒太郎	
村竹種五郎	石津 紘	齋藤初太郎	吉川喜代三郎	村口八良兵衛	中島干城	松井雄次郎	辺見卯三郎	寺田峰登	宇都宮常松	
藤本作右衛門	石橋文礼	小田三吉	石橋勘六	田津種五郎	原 順四郎	沼田良蔵	清水源左衛門	清水喜一郎	石井新蔵	
羽田兼次郎	隅原聿次郎	堀内峯三郎	谷 清太郎	田村嘉市	多河常四郎	岸田稼七	東 温蔵	竹井実造	新田壽夫	
井藤弥右衛門	鷗 儀三郎	白砂久右衛門	田村武左衛門	田村豊太郎	生田吉太郎	河野治三郎	檜山駒七郎	福岡隆之	眞田実一	
坂井市次郎	杉野喜助	栗山喜兵衛	田村広太	高杉周次郎	仁井山伊三郎	大久保鶴蔵	松田禎四郎	河野忠吉	原 源七	
宮橋坂次	清水彦一	市川秀助	石津調太郎	室屋勇吉	川上藤四郎	平田真一郎	村上儀惣次	村上喜代造	峰松次郎七	
友田元蔵	武田四郎	齋藤利平	村上権蔵	沖長小右衛門	柏原千二郎	三次徳右衛門	柏原喜代三郎	村上作松	村上米吉	
和田善助	末長文平	日高庄三郎	甲田元貞	土肥 一夫	村上清八	生永栄太郎	近藤幸太郎	村上 普	宇田為一	
堀田貞一郎	土居平三郎	吉光禎蔵	江川種三郎	久保田五郎平	石井壽平	藤田密爾	中本宗助	村上傳六	豊田維徳	
福原小市	山本建三郎	原 廣吉	生田庫太郎	伊藤彦四郎	為政良治	安藤 勝	森田睦造	川井清太郎	古川文之助	
伊藤伊三郎	三谷謙造	藤井清右衛門	村上直次郎	大久保糸太	松井軼四	小川寿太郎	藤井勘兵衛	内海儀平	森田輔一	

前田莞爾	近藤鉄爾	山森督治	川井豊四郎	園田秀太郎	神村直兵衛	金行民二	和氣清太郎	松井将莊	三好讓一
岡山 逸	後藤嘉十郎	後藤熊蔵	後藤市郎次	後藤市郎次	井上幸一郎	井上俊治	川北耕造	山口讓三	細井丈太郎
井本平三郎	村上彌五郎	西川今太	後藤嘉十郎	井上金蔵	廣田幸太郎	宮田亨一	三坂直彝	後藤 精	奥田美穂
森本政吉	桑原寅四郎	岡野小助	岡野忠蔵	村上虎之助	二宮興讓	辻 菊三郎	林 哲造	本山精一	田辺準九郎
田中李三郎	村上徳十郎	岡崎松太郎	原 真造	秦 清太郎	高野又之進	秋山為太郎	森川柳平	三田村金宜	影山義一
岡崎三郎	安田茂次	梶山絢平	岩本藤兵衛	川崎政兵衛	長岡善太郎	福村子健	山田寛一	長岡耕一	森 宝亮
伊賀市左衛門	平山八右衛門	金山與三平	宮地久兵衛	岡本保吉	林 豪一	奥 徳十郎	真野恒太郎	林 善九郎	松山馬之助
藤川常三郎	首尾木新蔵	奥田理右衛門	松川善之助	小川準造	位藤雄一	山田保興	管野清之助	瀧打信雄	池田秀一
金行九郎兵衛	首尾木半七	横山柳吉	井上卓爾	卷幡仙五郎	山内吉郎兵衛	田坂啓太郎	山野颯一	亀井吉兵衛	高橋一雄
橘小十郎	郷 熊五郎	中郷浅之助	島田金之助	安田仲作	三戸 襄	藤井清右衛門	林 顕吾	多田完平	三宅之恵
宮地良左衛門	松浦儀三郎	伊賀市左衛門	桑原八三郎	麓 善四郎	松浦久吉	田村亮四郎	阪田恒四郎	恩田俊三	土肥六郎
岡本豊吉	神田莊之輔	松田要之助	村井 素	田中大妊人	佐々井三平	飯沼 亮	向井貫一	恒松與一郎	児玉大之助
内海有三	平田恒四郎	丹下修造	清水 敏	粟根政次郎	児玉萬徳	篠崎常太郎	小川丈右衛門	大宅大助	田坂 昇
堀内静造	花咲直一	相模常造	瀬尾賢次郎	宇都宮秀雄	竹内完三郎	坂本富六	光保兼吉	加賀美淳之助	大多和泰作
福原伊太郎	松葉赫郎	長谷川永作	淵 俊助	亀山元介	藤野百太郎	堀江義一郎	長谷多嘉助	児玉政之助	金子 忠
内海宇一郎	鶴谷嘉五郎	村上八太郎	為政以徳	長井松太郎	土井貫一	佐々木玄策	高橋源吾	加川啓四郎	寺西猪作
恵谷忠平	宮本政五郎	白川佐一郎	恵谷久兵衛	松本惣平	豊原徳八	望月孝之助	秦 靖造	西原八郎	能勢七郎
三浦幸助	河野静夫	松浦久八	幡地光右衛門	川井榮四郎	福原晋之助	多田誠一郎	福島琢作	小河兼吉	渡辺元太郎
田中彌蔵	東 静介	松浦壽市	松浦彦十郎	田頭三左衛門	池田 肇	藤田孫二郎	登能和七郎	木村了造	田中群二
伊藤嶺太郎	宮地幸十郎	小林米三郎	森 堯二	丹下脩一	堀田善之助	秋光八郎	児玉吉太郎	児玉大助	田坂榮之助
秦 吾一郎	定中市右衛門	小川為蔵	松田伊勢蔵	波多野伊一郎	島谷梅松	中川元太郎	水野喜代次	品川舜太	正畑浮太郎
原田忠之	矢吹良太郎	熊田小十郎	田谷三郎	長 幾太郎	中本薫十	友村憲一	有田卓爾	板倉常四郎	加藤雄作
津島壽平	影山三助	福原吉兵衛	長谷川撰作	遠藤宮尾	細川健二郎	大堀教右衛門	須田胤平	名越寛治	山田恭坪

内藤清太郎	高坂新太郎	板倉雄平	福場祐十郎	板倉	中丸良之助	石井龍平	森本庸一	松原円助	三上増太郎
世良正雄	入江恒右衛門	青山健四郎	三上信太郎	岡部立圭	田原七太郎	増田忠八郎	免田祖平	木戸保太郎	砂堀為三郎
洪川庄左衛門	伊吹要四郎	岡田新七	小山善六	堀江庫次郎	新谷円助	相野田勝平	津田孝平	堀田卯平	三浦来助
良世興右衛門	白根久四郎	藤井多三郎	平尾知久平	長谷川善藏	の場善八郎	竹村来兵衛	天田寅之助	梅田幾太郎	高橋吉郎兵衛
橋本春太郎	山中六右衛門	横田彦太郎	谷口来太郎	柴野宗八	早田源次兵衛	真田厚次	樽原新一郎	久保群造	植本嘉一郎
土井雅雄	岸本斐夫	谷口嘉一	田中平四郎	吉本嘉一郎	御堂亀太郎	荒木賢三郎	古川栄藏	山本柳一	栗田伊左衛門
山隅太郎	高野一二	田村清藏	中井壽太郎	横田範四郎	神尾勘右衛門	前 為一	岡本兼吉	新 小左衛門	神田儀助
永井勝太郎	小山靖夫	吉田盈造	上岡壽平	西 東治	山野井友五郎	大下久次郎	松本弥五兵衛	古本農夫一	松本丘右衛門
松崎保太郎	永田憲太郎	光井篤一	白井良哉	南 哲太郎	松田多吉	廣藤多七	明石利三郎	土井禎助	久保万吉
秦 寅之助	佐々木重兵衛	佐々木嘉吉	小川保太	井上正知	吉岡禎造	稲田嘉一郎	出口本藏	竹野勇三郎	鷹橋徳五郎
河野恭平	酒井禄一	監谷株治	前田 雅	林 権之助	下地甚藏	加藤専深	国実弥四郎	寺一丈之助	本谷藤次郎
水口文太郎	沢原来之助	野間権三郎	中空翁助	山口源一郎	藤井亮造	白須庫之助	行武芳雄	村上盛之助	山口三郎二
重井六十郎	細井正吾	木村倉次	森井寛治	星野重三郎	徳正深諦	田原喜藏	千日 亮	高橋善九郎	高垣 剛
長岡徳三郎	水原定次郎	松本喜三郎	松崎貫一	早川廣右衛門	児玉良太郎	大西逸造	秦記傳藏	土居東一郎	吉井梅雲
上野米次	植田登一	藤井荒吉	八田八郎次	河下添源八郎	万所哲之助	高島大榎	水藤正一	片山文吉	田宮俊藏
小田儀助	児玉量平	田中登一郎	野上貫吾	大江類之助	竹内秀丸	大久保承元	古池亀太郎	武田覚了	藻監僧深
松田紋兵衛	伊水佐市	三東為三郎	廣瀬傳助	正木籐左衛門	大磯忠兵衛	宮本本四郎	田原勘兵衛	西宗善四郎	田坂儀平
谷 保太郎	平沢良左衛門	平林重太郎	山村甚三郎	藤野良之助	伊藤直福	藤堂只助	伊藤常兵衛	吉弘六平	武野良策
中曾政左衛門	三浦要次郎	瀬田寿太郎	小田国藏	登張善助	上杉善吉	正岡佐助	木村徹量	山蔭静夫	植原徳右衛門
今中円次郎	中木文吉	小浦来次	高野秀謙	丸子勘次郎	有田増太郎	小川 勲	宮本貞四郎	望月東之助	宮本清藏
岩本岩太郎	藤本宗琢	阿鷹久太郎	天野数之助	児玉市郎次	青木信之	望月孝之助	宮沢嵩憚	藤本幸太郎	国廣総五郎
石田和三郎	平石萬右衛門	隅田弁助	森田来兵衛	中西喜平	山崎保右衛門	西岡万助	柳本忠三郎	高浦円教	永井重太郎
藤原鉄吉	岡村早之助	枝松周助	光井庄六	田納甚太郎	大藤翫古	馬久地真五六	渡辺麟二	得能善兵衛	片山和宗兵衛

竹本平馬 黒田次六 小島覚應 堀内調右衛門 亀山眞月
山崎恵堪 天野礼次 天野儀六 桃山廓然 久保田恵箴
渡村与一右衛門 兄島嘉郎助 山本些平 高橋立哲 松本誠三郎
林 茂 吉田悦次郎 毛利一二 藤井龍天 田原周平
大島柳平 大田見龍 村上玄龍 小早川賢之助 福波普現
井上良貞 潮 善助 徳納喜作 神笠元次 小堀良太郎

史料⑤ 広島中学校寄附金募集手続⁷⁾

広島中学校寄附金募集手続

- 第一条 広島区ニ於テ募集スル広島中学校寄附金ノ惣額ハ八千八百円以上ヲ以テ目的トス
- 第二条 寄附金募集上便宜ノ為メ広島区内ヲ区画シテ十八部トス 其区域ハ広島区用掛区域ニ拠ル
- 第三条 広島区役所内ニ寄附金募集事務所ヲ置ク
- 第四条 各部ニ募集幹事若干名各町村ニ募集委員若干名ヲ置ク 但シシ委員ハ便宜ニ依リ数町村ヲ兼ヌル「コト」アルヘシ
- 第五条 幹事委員ハ主唱者ノ請願ニ依リ区長ニ於テ名望アル者ヲ撰ヒ依嘱セラル、モノトス
- 第六条 第一条ノ寄附金額ヲ分テ各部各町村負担ヲ定ム其金員ハ各部ハ幹事各町村ハ委員ノ協議ニ依ル
- 第七条 事務所ニ寄附人別台帳ヲ備置キ寄附者ノ住所姓名金額及納否ヲ明瞭ナラシムヘシ

第八条 幹事ハ部内委員ト協議シ募集上ノ計画ヲナシ且輪番ヲ以テ事務所ニ出頭寄附金募集上一切ノ事務ヲ惣管ス委員ハ町村内有志者ニ就キ金額并ニ住所姓名ヲ寄附帳ニ記載捺印セシメ而テ寄附願書進達ノ手続ヲナサシムヘシ

但委員ハ寄附人名金額ヲ町村内ニ揭示スベシ

第九条 前条寄附金ノ願書ハ明治二十年二月十五日限り進達セシメ現金ハ全年三月限リ上納セシムヘシ

第十条 寄附者ノ住所姓名及金額ヲ委員ハ幹事ハ区役所ヘ一週間毎ニ報告スベシ

第十一条 寄附金ハ第四百四十六国立銀行ニ預ケ入該銀行預券ヲ以テ事務所ヲ経テ区役所ヘ上納セシムヘシ尤寄附者ノ依頼ニ依テハ幹事若クハ委員ニ於テ取纏メ上納スルモ妨ナシ

第十二条 前条末段ノ場合ニ於テハ被託者ハ直ニ上納ノ手続ヲナシ領収証ヲ本人ヘ交付スベシ

第十三条 幹事并ニ委員疾病其他ノ事故ニ依リ事務ヲ取扱フ能ハサル時ハ相当ノ代人ヲ出スベシ

史料⑥ 新潟県高等学校設置趣旨送付状⁸⁾

高等学校設立之義既ニ新潟県ニ於テモ該計画有之趣ヲ以別紙之通広島中学校擴張事務取調委員長ヨリ送致来候ニ付為御参考及御送付候条御部内募集委員其他有志ノ向ヘ可成回覧相成候様致度此段申入候也

広島中学校拡張首唱者

吉村正順

明治二十年二月

広島中学校寄附金

第十部募集幹事

御中

史料⑦ 新潟県高等学校設置趣旨⁹

高等中学校設置趣旨

優勝劣敗ハ坤輿ノ実勢ニ「シテ」生存競争ハ社会ノ現象ナリ、方今¹世人智日ニ進ミ物カ月ニ開ケ外交内治益繁密ヲ加ヘ、列国交モ角シ人々相競フ、此時ニ当テ因循苟媮而シテ社会ニ共存ヲ望ムハ猶³腕車ヲ駆リテ汽車ニ伴ハントスルカ如シ豈啻ニ其後ニ瞳若タルノミナランヤ

皇上叡聖夙ニ坤与ノ形勢ヲ察シ、以テ国家ノ政令ヲ垂レ賜フ憲章⁵惟明ニ交物維新ナリ、府県人民深ク

聖意ヲ奉体シ奮励興起唯及ハサラン「コト」ヲ之レ懼ル亦盛ナラスヤ、抑又文明ノ事物ハ千状ニ「シテ」百出然レ「トモ」之レヲ約言スレハ智ト富トノミ、智富相疎¹⁸テ事業興スヘキナリ、幸福進ムヘキナリ、但シ⁸富ナキノ智尚ホ能ク富ヲ致スヘシ、智ナキノ富ハ偶々¹⁹以テ智者ノ用ニ資セラレノミ、若¹⁰二者ノ力ヲ兼有セハ天下ノ事遽¹⁹掌スヘキノミ、夫ノ欧米強国ノ四海ヲ横行シ万国ニ雄視シ会テ

慮スル所ナキモノハ、一ニ智富ノ力ヲ負持スルニアラズ「シテ」何ソヤ、之ヲ府県ノ競進ニ比視スルモ亦然リ、吾新潟県地利山ヲ襟ニシ海ヲ帯ヒ沃野連接巨川條流水陸ノ産勝テ計フヘカラス、真ニ天府宝库ノ地ト謂フヘシ、加之ナラス本邦開港ノ一ニ列シ未タ貿易盛運ニ向ハスト雖築港修埔外船輻湊ノ日ニ遭フハ益遠キニ非ルナリ、近者又鉄道山ヲ穿チ堤防水ヲ治スルノ拳アリ、況ンヤ素封豪戸百相望ミ財貨¹⁸鉅¹⁹万金氣屋ヲ潤ホス、賦²⁰ニ之ヲ他府県ノ富ニ比スレハ二三ノ優ヲ占ルモ四五ノ下ニ劣ラサルヘシ富力ノ大其レ此ノ如シ、而シテ智力ノ状果シテ何如、顧フニ在昔上杉氏ノ封ヲ会津ニ移サル、ヤ徳川氏ノ政策国土ヲ小刻シ²¹集藩ヲ分封シ勉メテ勢力ノ統合ヲ妨ケリ、是ヲ以テ諸藩或ハ善政美拳アリト雖其効績ノ及フ所僅々局部ニ止マリ、大業洪益ノ以テ此国ノ開進ヲ致スニ由シナシ、余習ノ馴致スル所明治郡県ノ世ニ至ルモ協和合同事ヲ¹⁶ナスニ便ナラズ、然レ「トモ」上ニ法律¹⁷アリ、下ニ志士アリ、督勸¹⁸憤發¹⁹稍ク積弊ヲ洗蕩シ以テ今日ノ智力ヲ致セリ、然レ「トモ」之ヲ富力ノ大ニ比スレハ未タ年ヲ同フシテ語ル可カラズ、是識者ノ恒ニ痛歎スル所ナリ、抑又智力ノ開進ハ教育ノ教開進ニアリ、吾県普通教育已ニ整理ノ緒ニ就キ、進学登高ノ士相続テ出ツ、而シテ高等ノ学校ニ至リテハ其設備未タ完カラストナス、去冬文部省ハ高等中学校ノ区域ヲ劃定シ全国ニ五校ヲ設ケラレントス、吾県属スル所ハ石川県金沢トス、其近キモノハ東京及ヒ仙台ナリ、之ヲ以テ家ニ資産ヲ有シ熱心²²ニ学ニ志スノ士ハ或ハ笈ヲ負フテ此等ノ地ニ留学スヘシト雖是必ス僅々ナランノミ未タ県下一般ノ後進ニ

望ムヘカラズ、然レハ則是ヲ如何シテ可ナランカ、県下ニ一ノ高等中学校ヲ制³²タル學³³ヲ建設シテ以テ後進修學ノ途ヲ開クニ若クモノナキナリ、高等中学校ノ制タル學科高尚ニシテ以テ英才ヲ育スルニ足レリ、又分科ヲ設置シ法律文學農商工業ヨリ醫術ノ専門ニ至ルマテ皆之ヲ修メシムル「コト」ヲ得ヘシ、故ニ高等中學ヲ卒フルモノハ才學有為ノ士タルヲ得ヘシ、即其智力ハ此開明ノ社会ニ驅馳シ、吾県ノ府庫ヲ開キ吾県ノ財貨ヲ用ヒ、先鞭ヲ府県ニ競ヒ、輸贏ヲ外人ニ争フニ於テ亦遺憾ナカルヘシ、若シ徒ラニ今日ノ現狀ニ安シシ守株²⁴ヲ見テ執ルゴトキハ、是腕車²⁵ノ輻輳ニ勝ルヲ知リテ殊ニ汽車ノ腕車²⁶ノ百倍スルヲ識ラサルノ類ノミ、畜ニ吾県ノ富ヲ増進スル「コト」能ハサルノミナラス吾府庫ヲ委棄シ吾財貨ヲ消散セン「コト」燎トシテ燃犀ノコトシ、想テ此ニ至ラハ吾県ノ志士豈袖手黙視²⁸スヘキノ秋ナランヤ、試ニ見ヨ他府県ニ於テ業已ニ高等中学校ヲ設立スルモノアリ、又方サニ其計畫ヲナスモノアルヲ是ニ由テ之ヲ觀レハ吾県高等中学校建設ノ挙唯此時ヲ然リト²⁷

〔²⁹ナ〕ス、凡ソ事物ノ變遷ハ勢ノ免ルヘカラサルモノニシテ、昨日ノ善美ハ既ニ今日ノ陋惡ニ歸シ、今日ノ新奇ハ焉³⁰ソ明日ノ陳廢ニ属セサルヲ識ランヤ、且ツ夫レ教育ノ事タル其成効ヲ咄嗟ニ望ムヘカラス結果ヲ數年二期スヘキモノトス是故ニ³¹集³²康³³ノ時ハ即チ噬臍ノ日ナリ思ハサルヘケンヤ、抑又教育ノ開進ヲ図ルハ資本ヲ蓄積スルヨリ善キハナシ、是事理經驗ノ顯著ナルモノニシテ復弁説ヲ跋タサルナリ、以上陳叙スル所ノ者ハ吾県目下必要ノ事權ニシテ、其取捨成敗ハ実ニ将来禍福ノ関スル所トス、吾県ノ志士

望³²ラクハ厚ク是旨趣ヲ諒シ奮然力ヲ此ニ致サレンコトヲ夫レ人智ハ蒙昧ナリ、教育シテ始メテ貴³³シ、財貨ハ死物ナリ、利用シテ始メテ貴シ、嗟吁人生幾何ソ生テ公益ヲ社会ニ致シ、死シテ恩徳ヲ子孫ニ遺ス亦善カラズヤ、此ニ中学資金募集ノ要領ヲ附シ、県下有志ノ士ニ告ク

明治二十年一月 篠崎五郎

中学資金募集要領

- 一 資金募集額ハ金五拾万円以上ヲ目的トス
- 一 寄附ハ左ノ物件ヲ以テ金円ニ換フル「コト」得³⁴
- 一 公債証書
- 一 銀行株券若クハ政府ノ保証アル会社ノ株券
- 一 寄附期限ノ最永期ヲ五ヶ年トシ、其期限内ニ於テ即時若クハ定期ニ納ムルハ寄附者ノ適宜ニ任スルモノトス
- 一 寄附物件ノ納期ヲ毎年六月十二月トシ、第一納期則本年六月ニ於テハ寄附金額ノ五分ノ一以上ヲ納ムルモノトス³⁵
- 一 但シ納期ニ先チ納ムルハ適宜タルヘシ³⁶
- 一 定期寄附ニシテ明治廿一年以後ニ陟³⁷ルモノハ、其未済金額ニ對シ年六朱ノ利子ヲ加ヘ、每期納金ト共納ムルモノトス³⁸
- 一 寄附者ハ金額ノ多少ニ応シ授業料ヲ減シ、若クハ無授業料ニテ生徒ヲ入学セシムルノ特權ヲ有スルモノトス、其割合左表ノ如シ³⁹

寄附金 授業料 三分ノ二 半額 二分ノ一 無

以上 未満

百円	貳百円	一人	
貳百円	三百円	一人	
参百円	四百円	一人	
四百円	五百円	一人	
五百円	六百円	一人	
六百円	七百円	一人	
七百円	八百円	一人	
八百円	九百円	二人	
以上百円ヲ増ス毎二本表ニ準シテ生徒ヲ増加スルモノトス ⁴⁰			
一 寄附者ノ子弟ニシテ入学試験ノ際定定点以上ヲ得タル「トキ」ハ通常入学志願者ニシテ定定点以上ヲ得タル者ニ先チ入校スルヲ得ルモノトス			
一 前二項ノ特権ハ其相続人ニ永世継続スルモノトス			
一 ⁴² 資金ハ左ノ種類ニ依リ保衛スルモノトス			
公債証書			
銀行株券若クハ政府ノ保証アル会社ノ株券			
銀行預ケ金			

中巻

この新潟県の「高等中学校設置趣旨」については『大日本教育会雑誌』に全文が掲載されている。¹⁰ この設置趣旨（以下、「教育会雑誌版」と略記）と今中文庫中の設置趣旨（以下、「今中文庫版」と略記）とを

比較すると若干の異同が明らかとなる。

まず、教育会雑誌版はひらがな交じり文であるのに対し、今中文庫版はカタカナ交じり文である。また、文章を逐一比較すると、次の「文面比較一覧」に示したとおり、使用漢字の違いや送りがなの差など、「高等中学校設置趣旨」の部分で三十三カ所、「中学資金募集要領」の部分に九カ所の異同がある。

誤字や書き損じの状況と合わせて考慮すれば、今中文庫版は教育会雑誌版を底本としたわけではないものと考えられる。

文面比較一覧

上段が今中文庫版、下段が教育会雑誌版。異同部分に「○」を注記した。本文の傍線を付した部分の番号と対応する。

高等中学校設置趣旨	方今	方今の○
1 方今	内地(誤植カ)	
2 内治	猶ほ○	
3 猶	ことし○	
4 如シ	たまふ○	
5 賜フ	維れ○	
6 惟	維れ新○	
7 維新	但	
8 但シ○	資せられんのみ	
9 資セラレノミ	若し○	
10 若		

33	貴シ	尊し
32	望ラクハ	望むらくは
31	且ツ	且
30	新奇ハ焉ン明日ノ	新奇は明日の
29	於テ	於ては
28	黙視	黙観
27	想テ	想ふて
26	腕車	腕車に
25	是	是れ
24	守株ヲ見テ執ルゴトキ	守株の見を執るとき
23	雖是	雖も是れ
22	熱心ニ	熱心
21	是	是れ
20	可カラズ	へからず
19	同フ	同ク
18	稍ク	稍
17	法律	政律（誤植カ）
16	ナス	成ス
15	由シ	由
14	雖	雖も
13	輻湊	輻輳
12	地利	地理
11	亦	又

註

- (1) 広島県立広島国泰寺高等学校百年史編集委員会編『広島一中国泰寺高
百年史』（母校創立百年記念事業会、一九七七年）には、「一八八六（明
治十九）年以来、本校の規模拡張を唱える有志らが相謀つて、本校維
持金の名の下に寄付金を募り、これを県庁に提出してその保管を依頼
- 42（箇条書きの文頭省略）
- 41 準シテ生徒ヲ増加スル
- 40 以上百円ヲ増ス
- 39（「左表」の簡略化）
- 38 共納ムル
- 37 陟ル
- 36 但シ
- 35 則
- 34 「コト」得
- 「こと」を得
- 即
- 但
- 渉る
- 共に納むる
- （全体に罫線あり、表頭に「生徒数」の見出し行あり、見出しに「寄附金額」・「授業料」の文字あり（授業料半額、授業料二分の一、無授業料）、助数詞「人」の省略（一人、二人））
- 以上金額を百円増す
- 準し生徒を増す
- ……

した。」(九二～九三頁)と述べるにとどまり、「規模拡張」の内容や改革案がどのようなものであったか、またこの時期に各府県で話題上っていた高等中学校については記載していない。

また『広島県史 近代Ⅰ』(広島県、一九八〇年)には「ところで広島・福山中学校の未整備状態を改善するため、明治十八年ころから有志による寄付金募集が計画された。募集趣意書および改革意見書では、中学校教育の目的は「中人以上ノ者陸海軍学校大学校其他高等ノ専門学校ニ入ルカ為」と規定され、上級学校への進学階梯としての充実を主眼とする改革案が立案された。」(一一三七～一一三八頁)として福山の動向について記すものの、広島中学校については寄付金経済時代に突入したとの記述にとどまり、ここに記された運動がどの程度具体性を持ったものであったかは明らかでない。

(2) 今中文庫は広島大学名誉教授今中次磨(一八九三～一九八〇)が一九七五(昭和五〇)年に広島大学に寄贈したもので、浅野家の重臣として聞こえた名家に伝来した資料群である。今中文庫の来歴および特徴については広島大学図書館研究開発室編『今中文庫目録』(広島大学出版会、二〇〇六年)を参照されたい。同資料群中の和装本等については早い段階から目録化されて公開されていたが、多数の文書類については二〇〇六(平成十八)年十二月に全面公開された。

(3) 今中文庫C三三―八「広島中学校規模拡張の願書并に指令の写」。活字印刷。() 書きの部分もすべて原文のまま。

(4) 今中文庫C三三―二二「広島中学校寄付金募集委員依頼証」。

(5) 前掲「広島中学校規模拡張の願書并に指令の写」。

(6) 前掲「広島中学校規模拡張の願書并に指令の写」。「主唱者」には二カ

所の追筆がある。前者は朱筆で「吉村」の訂正印があり、後者は黒色の活字となっている。追筆による四名を含め一〇八九名の名が上がっている。このうち、「片山直太郎」「後藤嘉十郎」「伊賀市左衛門」「望月孝之助」の名は二度記載されており、重複の可能性がある。

(7) 前掲「広島中学校規模拡張の願書并に指令の写」。用紙枠外に「四拾九円六拾弍銭」の墨書あり。

(8) 今中文庫C三三―七「高等中学校設置趣旨」。

(9) 前掲「高等中学校設置趣旨」。

(10) 『大日本教育会雑誌』第四九号、一八八七年二月十六日発行、三三～三九頁、所収。

(こみやま みちお・広島大学文書館)